看護学生の対人関係能力に関する研究
― 精神看護学臨地実習修了後における検討 ―

日下　知子[1]，曽谷　貴子[2]，揚野裕紀子[3]

A Study of Studeut Nurse's Interpersonal Relationship Ability
― Examination After Psychiatric Nunsing Study Practice Ends ―

Tomoko KUSAKA[1], Takako SOGAYA[2], and Yukiko AGENO[3]

キーワード：臨地実習経験，属性，対人関係能力

概　　要

本研究では，患者―看護師関係を円滑にする上で，臨地実習において看護学生に求められる対人関係能力を社会的スキルの概念として捉え，属性および臨地実習経験との関連を明らかにした．看護系短期大学２年課程１校の看護学生44名に対し，精神看護学臨地実習（以下，精神看護学実習と略す）終了後に属性に関する項目，対人関係能力を示す社会的スキルからなるアンケート調査を実施した．その結果，看護学生の対人関係能力は一般の短大生女子よりも高く，大学生女子と同等であること，臨地実習の経過に伴い初歩的なスキルおよび計画のスキルが関連すること，精神看護学実習修了後の対人関係能力では成人急性期実習の経験が関連する傾向を示した．この結果から，看護学生への対人関係に対する教育を効果的に行なうには，学生のもつ社会的スキルの特徴や専門分野における看護学臨地実習（以下，専門分野看護学実習と略す）経験が対人関係能力に関連することを考慮した上で，教育内容を検討することの必要性が示唆された．

1．緒　　言

看護は，看護師と患者との関係の中で実践されるものであり，その主な看護援助は患者やその家族(以下，対象者と略す)に対する相互作用過程[1)]の中で行われる．この対人的関係において質のよい適切な看護を提供するためには，専門職としての知識・技術だけでなく，看護師の資質や態度としての対人関係能力を身につけておくことが必要不可欠である．

看護基礎教育においても，平成９年のカリキュラム改正（新カリキュラムと略す）では施設だけでなく地域での活動等を視野に入れて看護ができる能力を有する看護師を育成することを目的としており[2)]，対人関係能力は幅広い対象者への看護援助に対して求められるべき能力として見なされている．このように心理社会的な観点をもたせながら，専門分野の専門性・特殊性を生かした効果的な教育体制の充実が図られている[2,3)]．中でも，実習において，看護が行われているあらゆる場での実習が可能となった[2)]ことは，専門分野看護学実習における専門領域の特徴をふまえた独自の目標が大きな意義をもつことになる．

精神看護学実習では，対象と自己の相互関係を理解し，人間関係を形成することを目標の一つとしており，このことはすべての専門領域にわたるこころのケア技術と看護専門職としての態度を学習する[4)]ことにもつながる．つまり，看護学生にとって精神看護学実習は対象者との関係を通じて最も自己を振り返るべき実習であると考えられ，対人関係において自己を冷静に判断することのできる機会として着目した．

看護学生の対人関係能力については，他者に対する態度の側面，あるいは両者の関係性における側面において様々な概念を用いた報告[5~8)]があるが，看護学生が臨地実習においてどのように対人関係能力を獲得するかについては，患者への援助経験[8)]が関連することの他，報告は少ない．

そこで，本調査研究は，精神看護学実習における学生の対人関係技術に対する教育・指導を効果的に行な

（平成17年９月29日受理）
[1]川崎医療短期大学　第二看護科，[2]川崎医療短期大学　第一看護科，[3]日本赤十字豊田看護大学
[1]The Second Department of Nursing Kawasaki College of Allied Health Professions
[2]The First Department of Nursing Kawasaki College of Allied Health Professions
[3]Japanese Red Cross Toyota College of Nursing

うための資料にすることを狙いとし，精神看護学実習終了後の対人関係能力として，人への初歩的な対処行動を示す社会的スキルを取りあげ，他の専門分野看護学実習における経験との関連性を調査し，検討した．

2．研究方法

1）対　象　者

O県内の看護系短期大学2年課程1校の学生で，精神看護学の講義後に精神看護学臨床実習を終了した57名を調査対象とした．回収された44名（回収率および有効回答率77.1％）を分析対象とした．

2）調査と時期

(1) 調査期間

2004年4月13日～10月15日

(2) 調査方法

調査用紙は，臨地実習の7専門分野にわたるローテーションのうち，精神看護学実習終了時に「精神看護学実習の振り返り」として，直接，本人に手渡し，一週間以内に各自が教員に提出する方法をとった．

(3) 倫理的配慮

倫理的配慮として，学生に研究目的と方法，個人が特定されないことおよび実習評価に結びつくものではないことを口頭で説明し，調査に同意した対象者から回答を得た．

(4) 質問紙の構成内容

質問は属性として，年齢，過去の精神看護学実習経験を，本カリキュラムにおける臨地実習内容として各専門分野看護学実習の経験の有無と精神看護学実習の期間を，対人関係能力として社会的スキル測定尺度18項目を，その他，精神看護学実習での体験を通した対人関係のとり方についての各自の学びを自由筆記として構成した．

<社会的スキル測定尺度>

看護学生の対人関係能力を測定するために，Goldstein, A.P.[9]が開発した社会的スキルを基に，菊池[10]が開発した社会的スキル測定尺度（KISS-18）を用いた．菊池[10]によると社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」と定義されており，①初歩的なスキル②高度のスキル③感情処理のスキル④攻撃に変わるスキル⑤ストレスを処理するスキル⑥計画のスキルといった6種類の分類をもとにして，若者にとって必要な社会的スキルを測定する18項目にて構成されている．回答は，「いつもそうだ」（5点）から「いつもそうでない」（1点）までを合計点で算出する5件法で，得点が高いほど対人関係技能が高いことを示す．この尺度のクロンバック α 係数は菊池[10]の報告では $\alpha=.83$ であった．

(5) 分析方法

分析は，統計学パッケージ SPSS 11.5J for Windows を用い，危険率5％未満を有意水準とした．各変数間の相関分析には，Pearson の積率相関係数を用い，平均値の差の検定には2群間で対応のない t 検定を，3群間以上では一元配置の分散分析を行った．

3．研究結果

1）調査対象の属性

分析対象に関する属性は，表1に示す．全学生の平均年齢は，20.8歳（SD 2.4）であり，精神看護学実習における平均実習期間は11.1日（SD 0.8），時間換算では平均89.0時間であった．

過去に，准看護師教育においてどのような精神看護学臨地実習を経験したかの問いに，臨地実習の経験があると答えた者は24名（60.0％）にとどまった．そのうち，精神科外来での実習経験がある者が1名（2.5％），病棟のみの経験がある者が5名（11.3％），精神科外来と病棟実習の経験がある者が15名（34.0％），施設見学

表1　分析対象の属性（N＝44）

		M	SD
年　齢		20.8	2.4
精神看護学実習期間		11.1	0.8
		N	%
過去の精神看護学実習経験	あり	24	60.0
精神科外来		1	2.5
病棟のみ		5	11.3
精神科外来と病棟		15	34.0
施設見学のみ		3	6.8
	なし	20	45.4
各領域看護学実習経験			
成人（慢性期）看護学	あり	8	18.2
	なし	36	81.8
成人（急性期）看護学	あり	16	36.4
	なし	28	63.6
小児看護学	あり	39	88.6
	なし	5	11.4
母性看護学	あり	32	75.7
	なし	12	24.3
老年看護学	あり	44	100
	なし	0	
在宅看護論	あり	23	52.3
	なし	21	47.7

M；平均，SD；標準偏差，N；人数

のみの経験がある者が３名（6.8％）であった．

各専門分野看護学実習の経験は，成人急性期看護16名（36.4％），成人慢性期看護８名（18.2％），小児看護39名（88.6％），母性看護32名（72.7％），老年看護44名（100％），在宅看護23名（52.3％）であった．

２）KISS-18の平均，標準偏差，信頼性係数

尺度は，range 18―90，M＝60.0（SD 7.6），信頼性係数 α は .84であり，使用した尺度は適当な内的整合性を備えていると判断できる．

３）精神看護学実習終了後の対人関係能力

(1) 対象のもつ専門性からみた対人関係能力

看護学生の対人関係能力の平均得点は，60.0点（SD＝7.6，N＝44）であった．範囲は，48から78点であった．平均得点を大学生女子の平均58.3点（SD＝9.0，N＝121）[10]，短大生女子の平均56.8点（SD＝7.0，N＝112）[10]と比較した結果，看護学生の対人関係能力は短大生女子よりも高く（t＝2.43，p＜.05），大学生女子との差はなかった．

(2) 過去の精神看護学実習経験と対人関係能力との関連

過去，准看護師教育における精神看護学実習経験の有無では，実習経験のある者（N＝24）の平均得点は60.7点（SD 9.1），実習経験のない者（20名）の平均得点は59.5点（SD 6.2）であった．しかし，t検定による平均値の有意差は認めなかった．同様に，過去に精神科外来あるいは病棟実習経験のある者（N＝６）とない者（N＝38），精神科外来と病棟実習経験のある者（N＝15）とない者（N＝29名），施設見学実習のみの経験のある者（N＝３）とそうでない者（N＝41）においても有意差は認めなかった．

(3) 臨地実習の経過および専門分野看護学実習経験と対人関係能力との関連

実習経過では，５領域の専門分野を修了した者を実習前半（N＝21），７領域の専門分野を修了した者を実習後半（N＝23）として二分した結果，実習前半の平均得点は60.7点（SD 6.5）であり，実習後半の平均得点は59.4点（SD 8.5）であった．しかし，t検定の結果，有意差は認めなかった．

次に，６分類した対人関係では２から７クールごとの実習経過に伴い，どのように対人関係能力が変化するのかを調査するために分散分析を行った結果，初歩的なスキル（F＝2.70，p＜.05）および計画のスキル（F＝2.52，p＜.05）においてその差を認めた．６分類の対人関係能力の平均は表２に示す．

各専門分野では，実習経験の有無別に平均値を換算しt検定を行った結果，成人急性期実習経験のある者（N＝16）の平均得点が57.1点（SD 6.7），ない者（N＝28）の平均得点が61.7点（SD 7.7）であり，わずかに

表２　看護学生の対人関係能力６分類（N＝44）

分　類	質問項目（18項目）	M（SD）	F値
Ⅰ初歩的なスキル	1　他人と話していて，あまり会話が途切れないほうですか 5　知らない人とでも，すぐに会話が始められますか 15　初対面の人に，自己紹介が上手にできますか	10.3（1.9）	F＝2.70*
Ⅱ高度のスキル	2　他人にやってもらいたいことを，うまく指示することができますか 10　他人が話しているところに，気軽に参加できますか 16　何か失敗したときにすぐに謝ることができますか	10.3（1.6）	
Ⅲ感情処理の スキル	4　相手が怒っているときに，うまくなだめることができますか 7　こわさや恐ろしさを感じたときに，それをうまく処理できますか 13　自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	9.8（1.6）	
Ⅳ攻撃に代わる スキル	3　他人を助けることを，上手にやりますか 6　まわりの人たちとの間でトラブルが起きても，それを上手に処理できますか 8　気まずいことがあった相手と，上手に和解できますか	9.8（1.5）	
Ⅴストレスを処理するスキル	11　相手から非難されたときにも，それをうまく片付けることができますか 14　あちこちから矛盾した話が伝わってきても，うまく処理できますか 17　まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても，うまくやっていけますか	9.9（1.8）	
Ⅵ計画のスキル	9　仕事をするときに，何をどうやったらよいか決められますか 12　仕事の上で，どこに問題があるかすぐに見つけることができますか 18　仕事の目標を立てるのに，あまり困難を感じない方ですか	9.6（2.0）	F＝2.52*

M；平均，SD；標準偏差，N；人数，*p＜.05

表3　看護学生の専門領域別にみた対人関係能力（N＝44）

	あり		なし		t値
	N	M（SD）	N	M（SD）	
成人急性期看護学実習	16	57.1（6.7）	28	61.7（7.7）	t＝−2.0+
成人慢性期看護学実習	8	56.2（4.6）	36	60.9（7.9）	
小児看護学実習	39	60.0（7.7）	5	60.4（7.8）	
母性看護学実習	12	61.2（7.4）	32	59.6（7.7）	
老年看護学実習	44	60.0（7.6）	0		
在宅看護論実習	21	60.7（6.5）	23	59.4（8.5）	

M；平均，SD；標準偏差，N；人数，p＜+.10

その差の傾向を認めた（p＜.10）．領域別の平均得点については表3に示す．

(4)　精神看護学実習の日数経過と対人関係能力の関連

病棟実習での経験日数ごとに平均値を換算し，t検定を行った結果，どの日数時点においてもその差を認めなかった．

4）精神看護学実習後の対人関係のとり方についての学び

精神看護学実習を終えた学生に，対人関係を円滑に保つために大切だと学んだことは何かを自由筆記させたところ，最も多かった内容は『相手の立場に立って話しを聞くことが大切』といった“傾聴や共感の大切さ”,『相手と同じペースになっていた自分に気づいた．相手のペースに巻き込まれないためには一定の距離をもつことが必要だとわかった』等の“距離の問題”，『一緒にいる時間を共有し，同じ空間にいることが信頼関係につながる』といった“居合わせ方”やそこでの『表情・言動・行動の変化を観察することで心理状態を理解することができる』という“観察の重要性”等に関するものであった．

4．考　　察

初めに，本研究における分析対象に関する属性について考察すると，年齢は一般の大学生程度であり，精神看護学実習における平均実習期間では，カリキュラム改正後の多くの調査報告[11)12)]と同様に臨地実習を2単位（90時間）として導入していた．准看護師教育においては，精神看護学実習を受けた者が全体の60％に留まり，このことは新カリキュラムにおいてその規定がないことと関係しているものと考える．

1）対象のもつ専門性からみた対人関係能力

今回の調査の結果，看護学生のもつ対人関係能力は一般の短大生よりも高いことが示された．つまり，看護学生はその専門的学習において，対人関係に関する教育を受けており，実際の患者への援助体験[8)]を通して身につけていることが考えられる．

2）過去の精神看護学実習経験および精神看護学実習時間と対人関係能力との関連

今回の調査結果では，准看護師教育における精神看護学実習の経験と対人関係能力との関係，あるいは新カリキュラムによって規定された精神看護学実習時間において，日数を重ねることによってどのように対人関係能力が変化するのかという点について明確にならなかった．これは，准看護師教育における教育背景が様々であり，必ずしも看護師教育に連動する内容になっていない可能性が考えられる．精神看護学実習において，学生は自らがケアの道具となって患者との対人関係の中で段階的な発展過程をたどる[13)]．この発展過程では，患者への援助を通して学生自身も様々な心の変化を起こすものであり[14)]，対人関係能力そのものが変動することが考えられた．臨地実習期間を単に時間的推移から捉える視点ではなく，こういった学生独自の自己評価のしかたを総合的に把握しながら成長を見守り，実習場における効果的な指導を考えるべきであろう．

3）臨地実習の経過および各専門分野看護学実習経験と対人関係能力との関連

次に，臨地実習の日数経過，専門分野看護学実習経験と対人関係能力との関連について

考察する．今回の調査の結果，学生は実習経験を経るに連れ，初歩的なスキルおよび計画のスキルといった対人関係能力が変化することが示された．つまり，学生は，患者への援助経験を積む中で，聞く・会話を始める・会話を続ける・質問する・自己紹介をするなど，対人関係において最も基本的なスキル[15)]ともいえるコミュニケーションを繰り返すだけでなく，医療スタッフや患者の家族といった周囲の人達ともかかわる機会を重ねることによって，タイミングを見計らったかかわり方を身につける[15)]ことが考えられる．

臨地実習という特徴上，患者の生活を中心にしながら，学生も限られた実習時間を有効に使えるよう実習計画を立てるといった学生自身の計画性が要求されることや看護過程の思考と援助[16]そのものが患者にかかわる情報をまとめ，問題が何処にあるかを決め，目標を設定し，その問題の優先順位を決めて計画を立て患者に合わせた援助方法を決定するといったいわば，計画のスキル[15]そのものであるとも考えられる．しかし，臨地実習には学生自身が学習段階にあるという看護実践能力の限界がある上に，最近は患者に対して学生が行なうケアのインフォームドコンセントの観点から学生がかかわる上での問題が存在する[17]．この限られた条件下で効果的な実習を行なうためには，学生自身が自分の現在の能力を知り[15]，現場での様々な状況を判断して行動することが要求される．このことは，学生にとって専門分野ごとに連続した臨地実習をこなしていくことと関係すると考えられる．

4）看護学生が捉えた対人関係における要因

精神看護学実習において，学生が患者との関係性の中で学んだことはコミュニケーションを技法として活用することの必要性を理解することにとどまったようである．しかし，信頼のおける対人関係をつくるにあたって，コミュニケーションを上手にとれる技能だけでは物事の全体をおさえたことにならない．対人関係はコミュニケーションの仕方だけでなく，態度や行動によって進展するもの[16]であり，学生が対人関係能力をもつためには，学生自らが体験を通して学んだことをどのように行動すればよいかという学生自身の活用レベルまで到達するような指導方法が検討されるべきであろう．

5．本研究における限界と今後の課題

本研究における課題を以下に述べる．

第一に，調査対象が一校一教育課程に限定したことは，現在，看護師教育課程として認定を受けている全教育課程を一般化して述べることには限界がある．また，准看護師教育の廃止や大学教育の推進の動きを熟慮した上で，対象校を教育課程の観点からも増やし，教育内容や効果的な臨地実習の方法を検討する必要がある．

第二に，本研究で用いた社会的スキル測定尺度は自己評定の尺度であることから，今後はより客観的で信頼性のある他者評定を選択し，取り入れることによって多角的な評価をする必要がある．

6．結　　論

1）看護学生の対人関係能力は一般の短大生女子よりも高く，大学生女子と同等であることが認められた．

2）看護学生の対人関係能力は臨地実習の経過に伴い，初歩的なスキルおよび計画のスキルにおいて関連していた．

3）精神看護学実習修了後の対人関係能力では，成人急性期実習の経験が関連する傾向が認められた．

謝　　辞

本調査研究にあたり，ご協力いただきました学生・教職員の皆様方に深く感謝いたします．なお，本研究は，平成17年度岡山県看護教育研究会（2005）において報告したものである．

引用文献

1）Anita Werner ŐToole, Sheila Rouslin Welt 編，池田明子他訳：ペプロウ看護論　看護実践における対人関係理論，東京：医学書院，46—61，1996.

2）看護問題研究会監修：新訂看護教育カリキュラム —21世紀を担う看護職員の資質の向上に向けて —，東京：第一法規出版，8—23，1997.

3）武井麻子：看護教育カリキュラムにおける精神看護学教育モデルの開発に関する研究（研究課題番号06451129），平成6年～平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書，1997.

4）金城祥教：精神看護実習教育とその課題，看護教育，Vol 43，No 7，520—525，2002.

5）三上れつ，小松万喜子：看護学生の対人関係に関する基礎的研究，第20回日本看護科学学会学術集会講演集，258，2000.

6）千葉京子：看護における社会的スキル尺度作成の試み，第16回看護科学学会学術集会講演集，Vol 16，No 2，272—273，1996.

7）長田京子，松尾典子，古賀美紀他：看護学生の対人関係能力の育成をめざした授業の教育効果，島根医科大学紀要，Vol 24，21—26，2001.

8）大見サキエ：対人関係能力としての看護学生のオープナー特性の検討 — 一般大学・看護大学・看護専門学校生の学校間・学年間の比較 —，日本看護研究学会雑誌，Vol 26，No 2，19—31，2003.

9）Goldstein, A.P., Sprafkin, R.P., Gershaw, N.J., & Klein, P.：The adolescent：social skilltraning structurerd learning. Cartledge, G., & Milburn, J.F. (Eds.), Teaching Social Skills to Children, Pergamon Press, 1986.

10）菊池章夫：思いやりを科学する — 向社会的行動の心理とスキル —，川島書店：東京，187—209，1988.

11）曽谷貴子，揚野裕紀子他：精神看護学カリキュラム変更前後の比較，平成16年度岡山県看護教育研究会，2004.

12) 内山繁樹：対人関係能力を育む学習を意識した臨地実習計画　新カリキュラムにおける精神看護学実習の構築，34—38.
13) 川野雅資：第2版精神看護学II精神臨床看護学，廣川書店，7—10，2000.
14) 田中美恵子：やさしくまなぶ精神看護学，日総研出版，345—349，2001.
15) 菊池章夫，堀毛一也：社会的スキルの心理学，川島書店，24—105，177—183，1994.
16) Rosalinda Alfaro-Lefevre 著，江本愛子監訳：基本から学ぶ看護過程と看護診断第5版，医学書院，1—30，2004.
17) 岩本郁子，和賀徳子，坪倉繁美他：看護医療事故予防教育に関するカリキュラムの実態，看護展望，Vol 30，No 5，86—94，2005.